

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01089

研究課題名（和文）日本古代の王権、国家と遊動的非農業民の関係性に関する研究

研究課題名（英文）Research on the relationship between the state and nomadic non-agricultural people ancient Japan

研究代表者

山田 俊輔（YAMADA, Shunsuke）

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：10409740

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では遊動的非農業民、特に海人と関係のある考古資料と考えられるト骨や骨角製品について南東北から九州までの約600点の資料について実見調査と研究をおこなった。その結果、静岡県静岡市周辺から神奈川県、千葉県をへて群馬県、長野県までを回遊するような人々の存在を想定できるようになった。その成果は2023年5月に刊行された『日本考古学』56号において「関東地方における弥生時代中期後半から後期のト骨と骨角製品の研究」として公開した。東海地方と関東地方を回遊した集団と西日本の海人集団との関係を探るべく資料調査をおこなったが、共通性よりも差異が目立ち、その関係性をいかに評価するかについては課題が残った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では弥生時代のト骨、骨角製品の悉皆的な調査研究によって、弥生時代中期後半の稲作農耕に特化した定住集落の出現と同時に広域を遊動する海人集団が現われたことを明らかにした。遊動集団は定住集団が必要とする物資や情報を提供し、定住集団は遊動集団へ農作物を提供するという相補的な関係が弥生時代中期後半に発生したと考えられる。古墳時代以降の王権は遊動集団を統制し、定住集団へ提供する物資や情報をコントロールすることで広域統合社会を実現していったと想定できる。本研究の学術的意義、社会的意義は、これまで注目されてこなかった遊動集団と王権、国家の関係について考古資料の分析に基づいて一定の見通しを示した点にある。

研究成果の概要（英文）：In this research I studied about 600 points of artifacts from South Tohoku to Kyushu with an investigation about animal bones used in fortune-telling(bokkotsu) and antler products such as antler handles and bow-end attachments. As a result, I became able to assume the existence of the people who made an excursion in Gunma, Nagano via Kanagawa, Chiba from around Shizuoka. The result released it as Study on Bokkotsu and skeletal products from latter half of middle Yayoi to later Yayoi period in Kanto region.

研究分野：考古学

キーワード：遊動的非農業民

### 1. 研究開始当初の背景

『古事記』応神段には、農業民に対する「食国の政」とともに山民、海民などの遊動的非農業民に対する「山海の政」をおこなっていたことが記されており、古墳時代に農業民とともに遊動的な非農業民に対する支配が大きな意味を持ち始めていたと考えられる。申請者は海民の墓と考えられる古墳時代洞穴墓を分析し、古墳時代中期と後期末から終末期に造営ピークがあることを明らかにした(山田俊輔 2018「古墳時代洞穴墓葬の類型」『考古学研究』64-4)。後藤四郎は海民を管掌した阿曇氏の活動は古墳時代中期に相当すると考えられる応神紀、履中紀の他に古墳時代後期末から終末期に相当する推古紀に集中して現れることを指摘している(「大化前代における阿曇氏の活動」『歴史評論』116、1967年)。考古事象と文献研究の成果を対比的に理解すると、古墳時代洞穴墓は海上交通や海上軍勢力という重要な役割を期待されて王権や豪族から接触されたことで海民としての集団的アイデンティティを意識し形成された墓制であったと理解できる。

古墳時代の鹿角製刀剣装具の研究において、初期のA系列については出土する遺跡の様相から製塩や海上交通などの生業に従事する海民が好んで使用したものであったと推定した(山田俊輔 2016「鹿角製刀剣装具の系列」『日本考古学』42)。古墳時代中期に出現するB系列、C系列については斉一性が高いことから特定の工房で集中的に生産されたと考えられ、王権や豪族が海民の好む鹿角製刀剣装具に直弧文を刻んだものを製作して配布することで海民との関係性の構築をはかったと考えた。古墳時代中期は古市・百舌鳥古墳群などの超大型古墳群の出現に示されるように中心政体が飛躍的に整備された時期である。鹿角製刀剣装具の研究成果は、そうした時期に中心政体が海民に対して大きな関心を寄せ始めたことを示すと理解できる。

洞穴墓、鹿角製刀剣装具の考古学的研究成果と『古事記』応神段の「山海の政」、海部と山部の設置は関連づけて理解でき、遅くとも古墳時代中期に王権と遊動的な非農業民の結びつきが認められる。中世にまで続く遊動的な非農業民と結びつく王権のあり方の萌芽は古墳時代に求められる可能性が高い。なぜ、王権と遊動的な非農業民が結びつくことになったのか、その端緒を探る鍵は古墳時代にあり、王権の成立において遊動的な非農業民がいかなる役割を果たしたかを明らかにする必要がある。

### 2. 研究の目的

様々な地域、時代の王権や国家が海民や遊牧民などの遊動的な非農業民と関係を有していたことが知られている。日本の古代、中世においても天皇と結びつく遊動的な非農業民の存在が指摘されている。『古事記』の記載や考古学的研究により、その端緒は古墳時代に遡る可能性が高い。王権や国家にとって遊動的な非農業民は不可欠な存在であったと考えられ、王権や国家の本質を考えるうえで遊動的な非農業民との関係性の解明は重要な課題である。王権、国家と遊動的な非農業民がいかなる理由で結びついていたかを検討するには、王権成立以前である弥生時代と王権が成立する古墳時代以後の遊動的な非農業民の実態を比較研究する必要がある。さらに、日本古代、中世、及び東アジア、東南アジア、オセアニアの王権、国家と遊動的な非農業民との関係についての諸研究、史資料を集成して検討をおこない、王権と遊動的な非農業民の関係性について総合的に考察する。

### 3. 研究の方法

王権と遊動的な非農業民がなぜ結びつくことになったのかを明らかにするためには、やや時間幅を長く設けて王権と遊動的な非農業民の関係を整理し、考察する必要がある。特に広域を統合した王権が成立する古墳時代の遊動的な非農業民のあり方とその前段階の弥生時代の遊動的な非農業民のあり方の共通性と差異の検討が必要である。

本研究では弥生時代の鹿角製把とト骨は、古墳時代以後の鹿角製刀剣装具、ト骨に連なる遺物であり、また、遠隔地で酷似した資料が出土していることから、広域を移動する遊動的な非農業民の使用したものであった可能性が高い。本研究では、第一に弥生時代の鹿角製把、ト骨の出土している遺跡の遺構や伴出遺物の特色をもとに類型化し、鹿角製把、ト骨を用いた人々の行動を復元する。第二に鹿角製把、ト骨、共伴する骨角製品の検討を通じて、これらを用いた集団の系統を把握する。鹿角製把、骨角製品については角取り、整形加工などの製作工程を検討し、個々の鹿角製把、骨角製品の製作集団を把握する。ト骨については、ト骨素材の整形方法、焼灼方法などを検討する。

また、日本の古代、中世及び東アジア、東南アジア、オセアニアの王権、国家と遊動的な非農業民の関係性についての資料や諸研究を集成し、日本古代の王権、国家と遊動的な非農業民の関係性について考察する。

### 4. 研究成果

本研究では弥生時代のト骨、骨角製品の悉皆的な調査研究によって、弥生時代中期後半の稲作農耕に特化した定住集落の出現と同時に広域を遊動する海人集団が現われたことを明らかにした。

海人集団のような遊動的非農業民は定住民が必要とする物資や情報を提供し、定住民は遊動定非農業民へ農作物を提供するという相補的な関係が弥生時代中期後半に発生していたと考えられる。古墳時代以降の王権は遊動的非農業民を統制し、定住民へ提供する物資や情報をコントロールすることで広域の社会統合を実現していったと想定できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山田俊輔	4. 巻 56
2. 論文標題 関東地方における弥生時代中期後半から後期のト骨と骨角製品の研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------